

むつ中間貯蔵施設への使用済み核燃料搬入を許さないために

使用済み核燃料搬入反対現地集会

2024年 **5月19日** (日) 午後1時

於：むつ来さまい館イベントホール

むつ市田名部町 10-1

中間貯蔵施設と**最終貯蔵施設**は同じこと！

行き先のない核のゴミ捨て場です！

1基でも搬入されれば下北核廃棄物最終貯蔵のはじまりです

下北半島を核のゴミ捨て場にさせない！
むつ中間貯蔵施設稼働を許さない



使用済み核燃料中間貯蔵施設を運営する「リサイクル燃料貯蔵(株)」が3月27日、青森県庁やむつ市役所を訪れ、2024年度から3年分の貯蔵計画を示しました。これによると事業開始時期を今年7～9月とし、使用済み核燃料容器を年度内に1基、翌年度に2基、翌々年度に5基の計8基を新潟県柏崎刈羽原子力発電所から運び入れるとのことです。

再処理事業は絶望的で行く先を持たないまま、この地に使用済み核燃料を搬入することは取りも直さず永久的に貯蔵されることとなることは必至です。また、この事業がスタートすることは全国の老朽化原発の再稼働に油を注ぐことになり、原発事故のリスクを一層大きなものとするにつながります。

今こそ声を張り上げ搬入反対を叫びましょう！

【むつ中間貯蔵・使用済み核燃料搬入反対現地実行委員会】

代表 中島 寿 樹

事務局連絡先：栗橋 (090-8924-5462)

中間貯蔵後の使用済み核燃料の搬出先はどこにもありません

かつて事業者は住民説明会で保管期間終了後の使用済み核燃料は新設する「第2再処理工場」へ搬出すると述べていましたが、今や「第2再処理工場」はその構想すら政府のどの部署にも存在しません。もはや六ヶ所再処理工場完工すらおぼつかない中で膨大な費用を投入して第2工場を作ることはあり得ません。

すでに中間貯蔵施設の大前提であるはずの「核燃料サイクル計画」は破綻しています。

青森県議会では当局答弁で「海外搬出もありうるのではないか」などと迷走発言も飛び出しています。こうした状況でむつ中間貯蔵施設が使用済み核燃料を受け入れるならば、行く宛てのない「核のゴミ」を永久に私たちの故郷に放置することとなります。

子どもたちの責務では美しいままの姿で故郷を残すことがないでしょうか。



操業に道筋も搬出先は
使用済み核燃料 行き場失う懸念大きく

むつ中間貯蔵施設
 青森県大湊市に建設中の中間貯蔵施設。入った燃料は約10年以内に搬出する計画だったが、搬出先が不明なままの燃料が積み重なっている。施設は2024年度に稼働する予定だが、搬出先が不明なままの燃料が積み重なっている。施設は2024年度に稼働する予定だが、搬出先が不明なままの燃料が積み重なっている。



核燃料 搬出先は不透明

最長50年の保
 むつ市の中間貯蔵施設に早ければ7月にも、使用済み核燃料が初めて搬入される見通しが示された。中間貯蔵事業は最長50年間、5千トを一時的に保管する計画。操業前の最終検査に用いる核燃料の入ったキャスク（貯蔵容器）1基が搬入された時点で、保管期限のカウントダウンが始まる。しかし現時点で「保管期限後」を見据えた明確な搬出先は示されていない。「中長期的な時間軸の中で調整がなされるものだ」と理解している。27日、宮下知事

搬出先に懸念を示す地元紙記事

26年度までに8基搬入

むつ中

3カケ

1基目は

最初の搬入は県、市、事業者による安全協定の締結が前提。県民説明会や議会での意見照会といった手続きも必要となるため、時期は7、9月が軸とみられる。1基目の搬入後は25年度に2基、26年度に5基を搬入する見通し。キャスク1基当たり69体の燃料集合体が封入され、ウラン量は約12トン。8基では燃料集合体計552体、ウラン量は96トンとなる。RFSは事業開始時期を24年度上期に設定。法令に基づき今年1月に原子力規制委員会に届け出た計画では、1基目の搬入時期を24年度上期とする。

RFS、きょう県と市に報告



方として、1基目... 東京電力... ングスの相時... (新編) から... 送って運び込まれるキャスクを... の使用前に事業者が検査

